

## コメント

### 高梨信乃 「母語話者レベルの正確さを目指す文法」の意義

日本語学習者が求める日本語能力のレベルは様々であり得る。ある時期まで主張されていたような、「日本人と同じように話せる」ことが唯一の目標であるというのが誤りであることは論を俟たない。しかし、それは、「母語話者のように日本語を使えるようになりたい」という学習者がいた場合に、その要求を無視してもいいということを決して意味しない。このことは、文法教育（ひいては、外国語教育）全般を考えた場合に自明であると思われるが、本論文にもあるように、現在の日本語教育界にはこうした議論がしにくい状況が存在する。本論文は、日本語教育の過去と現在を踏まえ、Native-likeを目指す学習者にとっての文法上の困難点を具体的に挙げつつ、今後の文法教育と文法研究が目指すべき新たな方向性を示したものである。(1)

### 阿部二郎 副詞「ただ」の使用条件

——中国語母語学習者による作文コーパスの事例に基づいて

副詞「ただ」はとりたてて助詞「だけ」と類似した意味を表すが、「だけ」よりその使用範囲が狭い。本論文は、中国語話者を対象とする学習者コーパスを利用して学習者の「ただ」の使用状況を観察し、その特徴をかなりの程度明らかにしている。本論文で対照されている「だけ」は誤用が多い形式として知られている。それは、学習者にとって「限定」という意味が表したいものである一方、「だけ」「しか」「ただ」など日本語における「限定」の表し方が複雑であるためであると考えられる。そうした意味からも、本論文のような基礎研究が今後も求められる。(1)

### 田中 佑 情報リソースを提示する

「によれば文」における文末表現の有無

アカデミックな文章を書く際に必ず必要となる表現に、先行研究の「引用」方法に関わるものがある。この論文は、「中島 (1983) によれば、「寝たきり」の重症児は、背中の触刺激を通して、外界を把握しているという。」のような文を、情報リソースを提示する「によれば文」と定義した。そして文末に「という」が現れるための意味論的・語用論的制約を指摘し、「という」が現れない場合の文脈的条件が示されている。検討においては実際の学術論文411編が使用され、アカデミック・ジャパニーズを学ぶ留学生とその指導者に具体的な示唆を与える研究である。(M)

### 市江 愛 日本語話者と日本語学習者はいつモシを使用するのか

日本語の仮定条件文において、「もし」は必須の要素ではないが、学習者の中には、「もし」が仮定条件を表す要素であると考えられる場合がある。この論文は、いつ「もし」が使用されるのか、母語話者と学習者で異なるのか、それぞれの使用場面を分析した。その結果、「例示」の場面ではいづれも「もし」をよく使用している一方で、「提案」および「依頼」の場面では、母語話者は多く使用するものの学習者の使用が少ないことがわかった。「もし」の使用について、今後の研究と教育のスタンダードになる論文である。(M)

### 劉 倩卿 中国語話者による非対格自動詞となる

漢語サ変動詞の習得に関する一考察

——学習環境及び日本語能力の影響に着目して

中国語話者の書きことばに「\*トンネルが開通される (→開通する)」 「\*気温が低下になる (→低下する)」のように、日本語では非対格自動詞が使われる環境で受身や「になる」を使う誤用が見られることがある。この現象に関して、これまでも散発的に考察が行われていたが、それらは十分な対照研究の成果に基づいたものではなかった。本論文は、日中両言語の対照研究の結果を踏まえ、習得レベル (超級、上級)、学習環境 (JSL、JFL) を考慮した習得調査の結果に基づいて、この現象についての考察を行っている。考察の結果、正用である「する」の使用はレベルおよび学習環境によって向上するのに対し、受身の誤用はあまり変化が見られないといったことが明らかになった。本論文は「母語の知識を活かした日本語教育文法」の方法論を示す好論文である。(1)

### 何 月琦 中国語を母語とする日本語学習者の受身文の使用実態

——学習者コーパスの分析結果から

受身文は日本語学習者にとって適切な産出が難しい文法項目として知られている。本論文は、I-JAS など3つの日本語学習者コーパスのデータに基づき、中国語話者の受身文の使用実態を、受身文のタイプおよび学習者の日本語レベルとの相関で捉えようとしたものである。考察の結果、受身文の運用の正確性には日本語レベルが関係していること、受身文の誤用や非用には、アスペクトや視点の問題が関わっていることがわかった。これは、受身文が適切に使用できるようになるのは、テキストレベルで日本語を操作できるようになる OPI 上級レベルからであるといった先行研究の指摘とも響き合うものと言え、中国語話者に対する日本語教育の具体的な指針となり得ると考えられる。(1)

岡 葉子・菅谷有子・遠藤直子・白鳥智美・森 幸穂・伊藤夏実  
『理工学系話し言葉コーパス』における受身表現の出現傾向

受身表現を使えるようにするにはどうすればよいか。これは、日本語の文法教育における大きな課題である。本論文は、大学の理工系7分野のゼミでの発表や質疑応答から収録した談話資料から作られたコーパスをもとに、主に使用頻度の観点からこの問題に取り組んだものである。分析の結果、受身の種類としては非情の受身が大多数を占めること、テンス・アスペクト形式では(タ形ではなく)テイル形が多いこと、連体節末の名詞は実質名詞が大部分を占めることなどの特徴が抽出された。専門日本語教育における文法教育の位置づけを考えるための示唆に富む論文である。(1)

鏡 耀子 丁寧体基調の書き言葉における普通形文末の混用

日本語のテキストでは基調となる文体が決まっています、丁寧体が基調の場合は文末は丁寧形が続く、普通体が基調の場合は文末は普通形が続く。その一方、どちらかの文体が基調の場合にその反対の文末(丁寧体基調の場合に普通形、普通体基調の場合に丁寧形)が使われる場合がある。スピーチレベルシフトと呼ばれるこの現象についてはこれまでも多くの研究があるが、本論文はBCCWJを用いた調査に基づき、丁寧体基調の書きことばにおける普通形の使用の要因が、その部分にスポットライトを当てることにあることを説得的に論じたものである。(1)

宮部真由美 中学校社会科教科書のテキストの特徴  
——地理教科書の述語形式の分析を中心に

外国にルーツを持つ子どもの言語問題を考える上で、「教科書が理解できる」ようになることは重要な意味を持つ。本論文は、こうした問題意識から、中学校の社会科(地理)の教科書を主に文法的な観点から分析したものである。分析の結果、テンスは超時が多いこと、物主語の受身文が多いこと、名詞述語文がその段落を読むためのトピックとして用いられることが多いことなどがわかった。これまである程度の知見の蓄積がある教科書の語彙的分析と本論文のような文法的分析が相まって、教科書のテキスト(テキスト)としての特徴が明らかになり、上記の言語問題の解決の一步となることを期待したい。(1)

方 敏 初対面からの縦断的な会話における疑問文による話題導入

話題導入の形式には、話題を投げかける情報要求(疑問文)と、自ら話題を語りかける情報提供(平叙文)があるが、本研究は前者について日本語母語話者の実態を明らかにするために、母語話者同士の初対面から4回目までの会話データを分析した。その結果、疑問文による話題提供は初回は多いものの、2回目には大きく減少すること、また、相手に回答を強いる疑問文の働きかけを和らげ、話題導入の唐突さを軽減するストラテジーが用いられていることが観察されている。初対面だけでなく2回目以降の対面場面も分析対象としている点は、この研究の特筆すべき点である。(M)

若松史恵 話題の移行と内容の変化の関係  
——話題境界調査の結果から

複数の人々が話をする際、話題は移行するものであるが、話題が変わったことを参加者はどのくらい認識できるのだろうか。本研究は、9人の調査協力者(非専門家)に、6組の会話資料を聞いて、話題の移行(話題境界)を判断してもらった。そして、ある時点で話題が移行したと判断した人数と、会話内容の変化との関係、複数の人が話題の移行を判断した基準について考察した。非母語話者の日本語能力として「雑談力」が注目される現在、このような研究の意義は大きい。(M)

小口悠紀子・山田実樹

上級日本語学習者の作文に現れる「主述の対応関係の不具合」の実態  
——作文指導・学習の効率化を目指すための基礎研究

日本語母語話者の子どもの作文に「主述のねじれ/不具合」と呼ばれる問題点が見られることが国語教育において議論されている。本論文は、同様の問題点が日本語学習者に見られるかについて、YNU作文コーパスを素材に考察したものである。考察の結果、日本語学習者にも日本語母語話者と同様の不都合が生じているものの、その原因は必ずしも同様ではない可能性が示唆された。日本語教育においては、「主述関係」に代表される文の構造を意識した読解教育、文法教育が十分になされているとは言えない。本論文は、今後日本語教育と国語教育の連携の可能性を探る際に必要な観点を与えてくれている。(1)

肖 宇彤 中国人日本語学習者と日本語母語話者の  
意見文の文章構成の可視化の試み  
——構成要素と形式段落の分析を通して

母語話者と非母語話者の間には必ずしも「言語能力」の差ではない違いが存在する。文章構成はそうした違いが見られる例であると考えられる。本論文は、意見文を素材に、中国語話者と日本語母語話者の文章構成の違いを形式段落と構成要素の展開の方向性という観点から可視化することを旨としたものである。分析の結果、中国語話者には水平方向の展開が多いのに対し、日本語母語話者には垂直方向の展開が多いといった興味深い差異が見られた。文章を書くという行為には母語での発想や規範意識が影響している可能性がある。こうした点を含めて、作文教育の基礎研究となる可能性を秘めた好論文である。(I)

湯浅千映子 新聞社説と要約文の表現類型  
——学部学生・学部留学生による140字大意の比較

文章の「要約」は、母語話者にとっても学習者にとっても難しいものである。本研究は、初年次段階の学部学生と学部留学生が書いた新聞社説の「大意」の要約文の分析を通して、両者が社説の全体構造をどう把握し、要約文にどのように表現するかを分析した。その結果、留学生の要約文には主題文が少なく、話題文が多く残存することを確認した。また、文章構造類型については、学部学生が原文の文章構造を反映して書く一方、留学生は原文の冒頭の話題文を中心文とする「頭括型」の大意を書くことが多いことがわかった。学習者の長文読解、また要約作成の指導に示唆を与える研究である。(M)

坪根由香里・数野恵理・トンブソン美恵子・影山陽子  
日本人大学生が書いたナラティブ作文の評価  
——日本語ナラティブ作文用の評価項目を用いて

出来事を時間軸に沿って説明するナラティブの能力は、アカデミック・ライティングにおいても必要とされる。本研究は、日本人大学生21名のナラティブ作文を〈内容〉〈構成〉〈日本語〉の3項目から評価して、特徴と問題点を分析した。その結果、特に評価が低い項目として、〈内容〉の「過不足ない描写」と「導入部とまとめ」、〈構成〉の「パラグラフ意識」と「記述量のバランス」、〈日本語〉の「正確さ」（一文の長さ、読点の使い方、文のねじれなどによる読みにくさ）が明らかになった。ライティングの指導に具体的な示唆を与える研究である。(M)

張 瀟尹 接触経験が少ない日本語母語話者は会話を通して  
どのように非母語話者の日本語レベルを判断しているか

日本語教師などとは異なり、接触経験が少ない母語話者は、非母語話者の日本語レベルをどのように判断しているのだろうか。本研究では、接触経験が少ない母語話者の判断基準を分析し、その結果、使用された文法・語彙の正確さ、日本語表現の自然さ、どのように発話するかよりも、非母語話者の会話時の様子、自身の発話に対する反応、自身の会話時の感覚、会話のスムーズさなどに注目し、非母語話者の日本語レベルを判断していることがわかった。こうした点を逆に応用し、学習者に自然な日本語運用を指導する方法の開発が期待される。(M)

篠原亜紀・松崎 寛 コミュニケーションにおける発話の「感じのよさ」  
——テキストマイニングによるコメントの分析から

本研究は、コミュニケーションにおける発話の「感じのよさ」の解明に挑んだ意欲的な研究である。4つの異なる場面での非母語話者の発話を「感じがよいかどうか」の観点で日本語教師が評価・コメントし、そのコメントをテキストマイニングで分析した結果、ストーリーを伝える場面では正確さ、語彙・文型の使用領域、流暢さ、韻律的要素が、自身の出来事を語る場面では話の内容、感情が伝わる話し方、流暢さが、依頼場面では談話構成、明確な説明、相手への配慮が、謝罪場面では談話構成、理由の適切さ、感情が伝わる話し方が、「感じのよさ」の構成要素であることがわかった。会話を学ぶ学習者とその指導者に有益な示唆に満ちた論文である。(M)